

# 福崎町文化

第25号 平成21年3月31日 兵庫県神崎郡福崎町福田176の1 福崎町文化センター発行

『東広畑古墳』



# 「近代史のなかの辻川」

辻川歴史探検隊員 山田 栄



## 一、幕末・尊王攘夷運動と辻川

近年、歴史記述のスタイルが変わったように思います。例えば「百年に一度の経済危機」の言葉が流通していますが、大概の人が「1929年世界恐慌」を直接体験していません。教科書で習った「ウォール街の株式暴落」だけでなく、世界恐慌当時の具体的な生活体験をもとに歴史記述していくスタイルだと思えます。歴史の方向性を示すには難がありますが、人々の息遣いが伝わってきます（最近刊行された、小松裕著『「いのち」と帝国日本』や大門正克著『戦争と戦後を生きる』はそんな印象を残してくれました）。「近代史のなかの辻川」もそれを真似てみたいものです。

昨年6月29日「第1回辻川歴史探検隊」の活動として、松岡為一さんの記憶をもとに辻川界隈の探索がありました。その説明のなかで、「柳田国男生家跡」（展示民家ではなく標柱のある地点）をはさんで、北西に共栄軒と南にカミ山軒、二つの芸者置屋があったことを聞きました（元・法務局のやや西に共栄軒、その間に松岡さんの生家があって、水道ポンプを芸者さんと共用していたとのこと）。

いつの頃、辻川に置屋ができたのだろうか。辻川という地名の由来は、南北の「生野街道」と東西の「いなば道」（この表記は『福崎町史 第四巻』「一 近世の福崎」にある山論に記された地図によっています。柳田国男著『故郷七十年』には「鳥取と京都の間を通う際に、とくに途中で大阪を訪う必要があったとすれば、この街道が近道として選ばれ」、

上田秋成なども通ったと記されています）との交叉する所にありますが、その地の利から宿場町として発達するなかで置屋が立地したのではないようです。

江戸末期、1863（文久3）年の「生野の変」（地元では「生野義挙」、『故郷七十年』では「生野騷動」と記されています）の長州奇兵隊を主要メンバーとする二七人の道中をおつてみます。澤宣一・望月茂共著『生野義挙止其同志』によれば、十月二日長州・三田尻を澤宣嘉卿（八・一八クーデターで京都追放された七卿の一人）を先頭に河上弥一（二十才頃の若き奇兵隊総督）や平野国臣（筑前藩士で著名な尊王攘夷派志士）ら二七人が二隻の舟で出発しています。海が時化<sup>しけ</sup>たため大半は同月八日に網干入港、ただ北垣晋太郎（養父市出身で京都府知事・貴族院議員など歴任）は前日に飾磨に上陸して斥候<sup>しほ</sup>していたとされています。北垣はその夜に「新町（福崎町）」（当時であれば「新村」と思いますが、後述する大庄屋・武八郎も慶応の頃には「新町」とも記しています）に到着し、「京都代表」の進藤俊三郎（朝来市出身で横浜正金銀行頭取など歴任）と情報交換し、屋形の三

木屋吉兵衛方にいた本多素行（元膳所藩士で、養父の庄屋・中島太郎兵衛と農兵取立を画策した虚無僧）のところへ相談に行きます。歴史的には、薩摩・会津藩主導の八・一八クーデターによって、尊王攘夷派の決起を企図した「大和天誅組の乱」が破陣した状況が伝わってきたのです。北垣らは「生野の変」に決起するか否かのハードチョイスを迫られ、決起中止論に傾きます（当時の政治情勢は単に「開国佐幕or公武合体」vs「尊王攘夷」あるいは「南紀派」vs「一橋派」という將軍継嗣問題という図式で割り切るべきではないと考えます。『日本近代思想体系1 開国』によれば井伊直弼も「攘夷」の考えをもっていたことが紹介されています。幕府が培ってきた「鎖国1打払令」が大義とすれば、「攘夷」は権力者相互の温度差でしかないように思われます。長門藩らによる、幕府を巻き込んだ朝廷中心の攘夷決行路線、「総花的な攘夷運動」が破綻しはじめ、混乱した政治情勢に入ったことを示しています）。

さて北垣らが利用した道筋を考えると、ご承知のように「銀の馬車道」は主として神東郡（市川の東側）を通り、江戸期の「生野街道」



を元にしていたと考えられるのですが、北垣らは必ずしもその「生野街道」だけでなく神西郡(市川の西側)の道筋も利用しています。一行の動きを再び、『生野義舉止其同志』で見ます。十月九日飾磨に入港し、翌日おそらく陸路によって、仁豊野の茶屋「奥田屋」に到着しています。仁豊野には問屋場(公的な宿泊設備)があり、その役人が姓名を改めています。澤宜嘉卿をいだく一行であるからか、「其中に判る」と答えずに「人足十七人」の先触を栗賀駅・猪篠駅に出しています(何とも傲慢な対応ですが、ここには辻川がでてきていません)。彼らは仁豊野で宿泊せず、そのまま市川西側を北上しています。というのはその道中、「溝口村で晒木綿六、七反」を購入していたことが伝わっているからです。

「(福崎)新村」から辻川へ、あるいはやや北から「井ノ口」へ市川を渡つたらしく、屋形と辻川に分宿することになるのです。

「奥田屋」で河上らの決起派と平野らの中止派は激論を交わしてありますが、その結果としての分宿ではありません。澤卿の「右毛左毛各有志ノ意ニ委ネン」態度を共有し、決起派に引きずられた“楯円形”のよ

うな一行なのです。宿泊の中心を辻川におけば、屋形よりも福崎新村とセツトで考えてもいいはず。『いなば道』は市川に分断され、その東西に宿泊施設があったと考えられます。『ふくさき史話』によれば、辻川には寛延三年から「宿屋」(松岡为一さんとの探索にあった「旅籠」と同一かは不明)を業とする一人がありました。また佐藤文太郎著『雞肋』には「(福崎)新町の宿屋樽屋」に姫路藩兵が本多素行をつれこんだとあり、福崎新村に「宿屋」が存在していました。しかしこれらの「宿屋」が“商人宿”と考えられ、公卿や多くの侍身分を含む一行が利用したと思われません。『ふくさき史話』に江戸中期以降の辻川を、「交通の要衝にあつたにしては商品経済のさほど進展していない、素朴な農村地域の姿」とうまく表現してあります。したがって、彼ら一行は屋形の「三木屋」(『やさしい市川町の歴史』によれば、屋形には江戸期に「三木屋」を含め九軒の宿屋があったとあります)と辻川の「大庄屋処」(あるいは東三木家・山崎組「大庄屋処」)とに分宿したと考えられます。このことは『福崎町史 第四巻』の「二 姫路藩山崎組大庄屋日誌」

に裏付けられるはずですが、記録は「文久二年二月二十九日(文久三年(1863)九月一日)までしかありません(直後の「生野の変」前後の記録はなく、次は「慶応元年(1865)七月一日となつています)。また記録から「宿屋」の存在を探してみましたが、筆者の東三木家・武八郎が姫路に出張して泊まる「町宿」がほとんどで、「慶応元年二月一日」に「福崎新村弥之助召出候処、郷宿二而和談行届」があるだけです。そして「文久三年七月六日」に「生野代官御帰候二付、辻川御泊」とあるのは、「辻川大庄屋処」と読めると考えています。

一行は分宿した二日後、十月十二日に生野代官所を占拠して“生野義拳”に決起します。かねて北垣らが準備していた「農兵取立」に結合して尊王攘夷のために「胆ヲ張り身ヲ抛ツ」たのです。その檄文は多田弥太郎(出石藩士、うまく京坂に潜伏するが翌年養父市の浅間峠で暗殺される)が起草したといわれています。柳田国男は『故郷七十年』「私の生家」に「私の祖父の陶庵というのは隣村川辺の中川という家から養子に来た人である。……陶庵は気概ある人で、有名な生野騒動の黒幕と

なつて檄文を起草したりもした」とも記していますが、離縁された陶庵が尊王攘夷派に加担する立場にあつたことを伝え聞いていたのだと思います。しかし翌十三日、出石・姫路両藩出兵の情報によって“破陣”することになります。脱出できた澤卿らもいたが、平野らは捕縛され、河上等は取り立てた農兵等に囲まれ自決します(奇兵隊を中心とする河上ら十三人の終焉の地が「鉱石の道」近くの「靖国神社」として残されています)。また中島太郎兵衛(養父出身で農兵取立に尽力した豪農)らは逃避行の途中で宍粟や猪篠の農民に殺されることになりました。

かといって当時の民衆が尊王攘夷に反対していたわけでもなく、開国佐幕に賛同していたわけでもありません。「二 姫路藩山崎組大庄屋日誌」の文久三年十六日に、世情騒乱故に「江戸詰御中間人足組当一七日ニ書出候様御用状」が届き、山崎組も応じています(武八郎の記録には、尊王攘夷派・姉小路卿襲撃事件の犯人探索の「御達」を六月三日に受け取つたこと、「夷船と夕、カイニ相成候」と六月廿一日に長州下関砲撃事件があつたこと、なども記していますが事務的に読めます)。六月に

はその内の一人「(溝口村の) 太右衛門」が「唐人頓夏」の鉄砲を隠匿する「不調法」で召し捕られています。鉄砲を隠匿した彼の行為には、攘夷や開国よりも同郷への「みやげ」であったように思われます。江戸で「腰なわ」になった彼は「焼切」って逃亡していたのです。

五月十四日には「此度異国打払二相成……献金可致」ことになりませんが、七月になっても溝口村の二人が承服せずに大庄屋・武八郎が説得する有様です。武八郎の記録では、村の利害や芝居興行についての方が切迫感があります。例えば八月十一日の「坂戸村若者四人、田口村若者四人召出、他領もの引入芝居等いたし候義取糺候」という類の記録が散見しているのです。

そういう状況であったからまた、「生野の乱」の鎮圧に繰り出された姫路藩兵(市川西を二百騎・市川東を三百騎、総勢千人ともいわれる)に驚きの目を向けたと思われまます。「素朴な農村地域の姿」をした辻川に「置屋」が立地するようになるには、幕末から何年か経過しなければなりません。神東郡役所は明治十九(1886)年福崎に移転す

るまで屋形にあったことは象徴的です。柳田国男は『故郷七十年』「母の思い出に」に、「要処要処の大きな(人力車の)立場だけは、大抵はきれいな茶屋、又は旅館に従属するようになり、私などの七つ八つ頃(明治十五、十六年)には、もう少しずつ所謂脂粉の気がただよい始めて居た」と記しています。「辻川大庄屋処」の門扉を削ることもなった、明治九(1877)年「銀の馬車道」完成に象徴される商品経済の進展が辻川を底上げし、二軒の置屋を形成していったのだと考えられます(図版にあります明治二四年の福崎の地図には市川に架かる橋梁はまだ見えず、渡し舟の記号があります)。

## 二、明治初年「解放令反対一揆」と辻川

明治四(1871)年、辻川組三木大庄屋で始まった「播但一揆」は日本最初の「解放令反対一揆」です。その前に「生野の乱」で気になっていたことを付け加えさせてください。

“河上ら十三人の終焉の地が「鉱石の道」近くに「靖国神社」としたのですが、十三人に含まれていない「(河上の) 僕・徳蔵」の行く末が

曖昧なのです。試写会(公開されなかったと記憶していますが……)でみた、須藤久監督『歴史よお前は誰の為に』(一九七一年製作映画)では、「僕・徳蔵」が被差別部落出身で屠勇隊(奇兵隊の内の一隊)の一員であったとされています。先行研究は「僕」の立場でしか記述されていなかったたので、驚きました。(以下未了)



←明治24年の福崎  
(『福崎町史 第四巻』「付図Ⅱ」より)

↓明治初期～中期の辻川  
(第1回・辻川歴史探検隊の資料にプロット)

